

特115

903

名山清川

大阪商工新聞記者 高山内峯吉 共著
別府新報記者 古川湖川

名山清川社發行

6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18

始



改訂版

名山清川

七月上旬發行

大版六十四頁洋裝美本

◀ 告 豫 ▶

本書は文筆に従ふ吾人の餘暇を偷んで匆卒の間に成しもの焉馬の誤は元より孟浪杜撰の誹を免れざるべし。故に吾人は近く全部を改訂し、更に増補して稍完全に近からしめん事を期す。幸に江湖の愛讀を賜はらん事を望む。

名山清川

一名山とは何ぞや

地を抜く一萬三千仞、巍然として八州の天に聳む、浩然として白扇を東海の空に飄すものは富士山である。春草柔かに萌ゆる處、其昔大宮人が櫻かざして逍遙ひけん奈良の舊都の若草山、如何に詩人の熱情をそゝつて千載に、其名を懐かしむるものぞ。一は天下の名山にして高山であるが、一は千古の名山でありながら奈良市外の一丘陵に過ぎない。山高きが故に貴からずとは千餘年前弘法大師の喝破した處、高くして醜なるもの、低くして美なるもの、何ぞそれ人物の大小輕重に似たる事の多きぞ。身を貴族の雲上に置きて然かも無爲徒食は未しも、醜を世間に唱はるゝ人間の層が有るかと思へば、一平民の太宰相厚敬も出る。水鳥の羽音に腰を抜かす大將軍も、鼎鑊の前に泰然たる町奴、長兵衛もある。人物と山岳と、比し得て妙ではないか。一は大自然の人物であり、一は人間界の山岳である。吾人が茲に現代人物評論として、殊更に名山なる名稱を冠した所以は、一ある。たゞ夫れ名山といひ、敢て無名山と云はない。天下無名の山が多い様に、世間に無名の人が多い。無名の人元より吾人の關する處ではない。只有名にして始めて吾人と交渉があり、將た社會と交渉がある。無名の人はやがて無能の人である。有名の人にして始めて天下社會に有用の人材と稱すべきである。或人は云ふ。虚名、賣名何ぞ自ら高うせんと、吾輩叱して曰く、虚名と賣名と既に在り、君尙無名を取るかと。誰か今日に於て虚實、眞偽の評價をなし得ん、只有名ならんのみだ。吾輩の敢て人物評論に筆を執る所以は即ち茲にある。

(未完)

名山清川

…(一)…

大正
13.6.6
内交

持115
903

平田吉胤君

元大分縣會議長として、縣下憲政派の領袖たる我平田吉胤君は如何なる人ぞ。その炯々たる眼光、その堂々たる風姿、そも何をか歳し、何をか成せし、茲にメスを揮つて君の半世を解剖して見やう。

君は慶應二年七月廿日、宇佐郡驛館村法鏡寺の北家に生れ長じて國東半島の碩儒鴛海量容先生の涵養舎に入り、十七歳更に京都に遊びて同志社に學び、明治廿二年遂に京都に入つて慶應義塾の學生となつたが、當時君は海外遊學の志物々たるものがあつて早稻田専門學校に轉じ英語行政科で大に他日の飛躍を期したが、不幸二疊に犯されて明治二十四年故山に歸臥した。折しも下毛郡那馬溪の名家中田家の懇望に遇ひ、入つて其長女羅比子に配した。此年猛郎翁は、君を迎ふるに先ちて遠逝せられたので、君は入縁以來未亡人嘉壽子を慰めて大に家運の興隆に努めた。處が不幸にして明治廿六年夫人羅比子の早世に遇つたので、家系の維持上義妹佐和子（猛郎

氏の二女）を繼室とした。爾來君は能く家運を守り明治卅四年一躍城井村長の椅子に上り、次で村農會長にあげられ、卅六年下毛郡會議員に卅八年郡農會議員に推され、君の手腕は充分に發揮せられて、郡内の刮目する處となつた。

かくて名聲日に月に揚り、明治四十年九月大分縣會議員の改選に際し、君は同志に推されて芽出度當選の榮を擔ひ、四十三歳を以て縣政壇上の花形役者となつたのである、此任期中は憲政派は少數黨として、君の識見理想を實現する事が困難であつたが、之が爲却つて君が關將としての手腕と、理想や抱負を縱横に發表する事が出来て、君は一躍縣下政界の重鎮として待たるゝに至つた。次で明治四十四年九月、滿期と共に君は再び同志に推され大多數の當選を見、既に前期に於て遺憾なく君の人物を同志に認識されてゐるので、今多數黨の順境に立つと共に、同年十月十六日の臨時縣會で湯々縣會議長の椅子に上つたのである。かくて大正四年縣議改選に當り

三度其選に當り、再び議長の榮職を占め、在職八年縣政の統領として絶倫の手腕を發揮し、其間明治四十四年十月議長就任の壁頭、今上陛下當時皇太子殿下として佐伯灣に行啓あらせらるゝや、昌谷知事と共に富士艦上波多野東宮武官長侍立の下に天機を奉伺し、同年十一月久留米に於て、明治大帝最後の陸軍特別大演習に陪觀の榮を担ひ、久留米に於ける大饗宴に陪宴し、次で先帝の御大葬に參列し、大正四年更に御即位御大禮にも列し、新陛下の天顏に咫尺して二條離宮の大饗宴に招かれ、大正六年又九州大演習に陪觀並陪宴を賜ひ、幾多無上の光榮に浴した事は、歴代縣會議長中蓋し空前である。かくて君は中津高女縣立引直し、新耶馬溪道路改修等幾多地方問題にも貢献する處が多く、功成名遂げて大正八年改選期に任を辞し、爾來縣下憲政派の領袖として、山口支部長と共に大に黨勢の擴張と共に地方の發展に貢献しつゝある。



君不幸にして子女なく、明治卅九年實弟和三郎君を養うて義妹翁子（猛郎氏の三女）に配し、後嗣をなした。和三郎君は熊本五高を経て京都帝大獨法科に學び、明治卅七年新法學士として司法官に任じ、下之關、岡山、山口、小倉の各裁判

所判事に歴任し、名聲大に振つたが、今や野に下つて小倉市に辯護士として大に名聲を馳せつゝある。

君深沈にして機略縱横、多年縣下の政界に馳驅して其人格は益々圓熟し、出で、は縣下の名流となり入つては郷黨の儀表と仰がれ、悠々溪山の風趣に嘯きつゝある、年齒方に耳順に滿つ、君も亦多幸ではないか。



山上猛虎君

大分市唐人町
明治十七年十月十八日生

本年の衆議院議員改選に當り、大分市から憲政會の領袖箕浦青洲先生が前回同様立候補したのに對し、久恒炭坑王が政本黨より向を張つた。此も角力に成まいと思はれた此對戦は刻々に箕浦派の壘を摩し、開票の結果は四百票の差と云ふ際どい處まで推し詰てゐた。此善戦は參謀長たる我山上法學士の力である。人物より閱歷より月と地位の差と思はれた久恒君は、お蔭で一躍天下の久恒となつた譯である。久恒君をして斯程迄に善戦せしめた山上君はどんな人だ。

君は大分郡由布川村大字東院故山上雷造翁の長男である。幼時から山上家の寧馨兒として知られたが、大分中學、第五高等學校を経て東京帝大獨法科に學び、明治四十三年新法學士として法曹界に入つた。斯くて大分、鹿兒島、宮崎各裁判



所判事として異數の成績を挙げ、大正二年期する處があつて悠然冠を掛けて野に下つた。次で大正三年三月大分市に辯護士を開業し、法學士として學理の蘊奥を極め、判事として司法の實際に通達した君が、理論と實際と二つ乍ら圓熟した手腕は、忽ち名聲を地方に轟かすに至り、又父祖傳來の巨資を擁して地方實業界にも曠足を伸べ、大正八年成清銀行常務取締役に擧げられたが、十一年五月辭して佐伯銀行頭取に就任し、同年十一月更に大分信用組合を創立して其組合長となり庶民銀行の特長を發揮しつゝある。然かして政界に於ては大正十一年大分市會議員に當選し、十二年五月更に大分縣農會代議員に選ばれ、同年九月一躍大分縣會議員に當選し、大分市政本派の棟梁として、名譽日に月に振ひつゝある。君頭腦明敏胆斗の如く、年齒漸く四十有一、前途洋々とし其將來は刮目すべきである。

…(四)…

西門藤一君

玖珠郡八幡村大字古後字下川内
明治三年三月廿六日生

先代孫右衛門氏夫人タチ子との間に三男あり、君は其長男にして、廿八歳の時村内字綾垣上島三郎治氏の三女フヂ子を娶り、四十一歳巖君の逝去に會ひ、爾來一家の經營に當りて勤儉力行農事に努め、名聲年と共に加はり久しく下河内組長たり、現に下川内共同墓地管理者である。君二男一女あり、長女タツエは下郷村大字金吉字伊福中島彌作君に嫁せり。長男國夫君尙幼なるも出藍の象ありとぞ。

延谷善八君

下郷村大字宮園字宮園
明治二十年六月十日生

君は津民村大字川原口字田處橋久市氏の二男なり。小學校卒業後暫らく小倉市に出で染物業に従ひしが、廿二才の時延谷家の養嗣となれり。延谷家は宮園の名家にして延谷元道翁と同祖なりとぞ。君入縁後家業を繼ぎて飲食店を經營し、次第に家運を向上する所あり、夫人タチ子を玖珠郡北山田村大字戸畑秋吉家より迎へ、既に猛、貢の二男あり。資性篤實能く分を守りて家業に精勵し、地方の信用厚しとぞ。

名山清川

寶珠山信市君

槻木村字藤原谷
嘉永四年十二月十六日生

先代利ハ氏勤儉力行大に農事に精勵し、新邸を建築し、温厚篤實の老農として知らる。夫人キタ子との間に一男一女あり、君は其一男にして、幼時より質實温厚乃父の風あり長じて卅八歳の時日田郡小野村井上芳助氏の三女イワ子を娶り、琴瑟和して益々家業に努め、新地を開墾する事二段歩家運大に興隆せり。君一女あり、次女マツコに日田郡小野村より助作君を迎へ、既に三令孫ありと云ふ。

檜原門海君

津民村大字中畑字檜原
天保十四年正月九日生

君は檜原山正平寺現住職檜原桂中師の令弟にして、同寺末櫻本坊の住職たり櫻本坊は保元二年子二月道仙阿闍梨の開基にして、春風秋雨八百載、正平寺の隆運と共に今日に至り、法燈一時光滅せんとするの悲運に會せしも近時再び君により赫々の光輝を放ちつゝ、修驗道の秘法嚴として溪中に徳化す君の長男重澄君既に壯齡に達し、其子由夫君を嗣子として二千尺の峯頭に俗塵を避け行ひ澄ましつゝありとぞ。

…(五)…

重松誠一君

字佐郡安心院村大字下毛
明治廿二年十月十一日生

「求めよさらば與へられん叩けよさらば開かれん」とは豫言者基督の教訓である。醸造石數千五百石、八代二百八十年の光輝ある沿革を有する酒造家縣屋は、今や九州酒造業者の覇者として、將た銘酒萬歲松、笑心、花筏の醸造元として、上戸黨の間に噴々たる名聲を馳せてゐるが、縣屋が今日の名聲を諳はるゝに至つたのも、父祖數代に亙る苦心慘憺の結晶である事を忘れてはならない。殊に君の曾祖父茂十郎翁は才德地方に冠し、深見河畔の紀念碑は翁の德行を永遠に語りつゝある。加ふるに嚴君龜太郎翁は郡内一流の名士として、今や耳順の高齡を以て白髮童顏仙容日に加はり、山中銀行頭取として地方金融界に晩年を捧げてゐる巨人である。其長男として呱呱の聲をあげた君は、始め東京帝國大學農科に學び



其巨大なる資産を以て農村の革命的開發に當る理想を抱いたが、嚴君の諄々たる教訓に遇ひ、七代三百年の光榮ある家業を抛つに忍びず、決然初志を翻して嚴君の負托に報んと、大正二年直入郡竹田酒造研究所に入つた、蓋し帝大出身で該所に酒造研究生たる如き。君の決心の如何に異常なりしかを知るべきである。果せる哉大正三年業を繼ぐと共に、當時三百四十石の醸造石數は、十年後の今日一躍一千五百石となり、博覽會、共進會等の受賞は云はずもかな、九州屈指の銘酒として宇佐郡内は元より、關門、若食、八幡、飯塚等の炭坑地、豊後各温泉地に壓倒的販路を占有するに至つた。君資性温厚着實にして、能く人に接し座談に巧みで、之に對すれば春風座邊に沸くが如く、此大酒場の經營者としての勇氣は何處に藏するかを疑はれる。實弟哲二君は理學士、其他は皆専門學校に在學すと云ふ、重松家も亦盛なりである。

麻川浩君

眞坂村大字白木字帖返
明治廿三年一月七日生

君は明治四十三年三月大分縣師範學校を卒業し、翌月日田郡大山村東尋常小學校訓導に任じ、次で大山尋常高等小學校日田町男子尋常高等小學校、下毛郡上津尋常高等小學校訓導たり。現に櫻洲尋高小學校訓導として育英の天職に一身を捧げつゝありと云ふ。

秋永治市君

四谷村字中野
文久二年九月五日生

君は治右衛門氏の次男にして、少壯の頃より村内小畑氏に就て漢學を修むる事數年、老後の今日尙古書を繙くを以て樂と云ふ。其後専ら農事に精勵し大に家運を向上せり。而して大正二年四月西谷村會議員に選ばれ、更に木炭検査員として今日に及べりとぞ。

安部作藏君

上津村大字落合字宮の齋
嘉永六年九月十五日生

君は二十歳の時善作氏の養嗣子となれり。後建築土木請負業に従ひ聲望漸く高く、明治十七年落合村會議員に當選し、

爾來衛生組長、郷社御祖神社氏子總代、郡米穀改良取締、上津村會議員、上津南部東谷連合信用組合理事等に任じ、地方の爲貢獻しつゝあり。君の長男泰造君は新進教育家として知られてゐる。

安部伸太郎君

上津村大字落合字宮の齋
明治三年九月九日生

君は着實穩健の人として知らる、年齢僅かに二十歳にして青年組長に推され、爾來孜孜として農業上の經驗修養を積み或は農會評議員として或は農會幹事として斯道に盡瘁せる處尠少ならず。かくて大正六年上津村會議員の任に上り村治に貢献しつゝあり。

青木榮君

城井村大字小友田
明治廿二年二月八日生

青木家は小友田村に於ける舊家にて、君は幸吉氏の長男なり。日本大學卒業と共に東京電氣會社に入りて其の手腕を揮ひつゝありしが、不幸病の爲故山に歸り、爾來専ら木炭商を營み、現に郡木炭組合議員たり。君は玖珠郡森町山上小六氏の長女ヤエ子を娶れりとぞ。

吉武利作君

城井村大字戸原字口ノ林
安政四年一月七日生

君は久左衛門の次男にして長じて中津町瀧口新作氏の三女ナツ子を娶り、琴瑟能く和して専ら家事に勞しみ能く老父母に仕へしが、明治十九年嚴君老境の故を以て家を嗣ぎ、爾來益々家事に努め家運の興隆を計れり。君は林業界の有望なるを悟り、家事の側ら卒先材木商を創め、當時君は材木業者間の鬼才として從横の手腕を揮ひ、遂に獨力口ノ林製材所を創設せり。かくて君が村内に於ける聲望年と共に加はり、久しく村會議員の任に當り、現に口ノ林區長、氏子總代等の名譽職にあり。地方の爲貢獻する處頗る多し。君五男二女あり、



長男策郎君曩に商業學校を卒へ君に代り材木業に當り若弊噴たり入り敬大君は東城井登記所代書人として聞わ、三男廣君中津中學に學ぶ。

藤野龜太郎君

吹球郡八幡村大字古後字原
文久三年七月十九日生

藤野家は藤原鎌正の末裔にして、數百年來此地に土着し、地方有數の名家たり。君幼時より質實温厚農事に精勵し名聲又次第に高く、八幡村古後二十一番組長、古後一心會委員等に擧げられ地方の爲貢獻する所頗る多し。又造林開墾等に意を注ぎ、家産日に月に増殖しつゝあり。君夫人ヲネ子との間に子なく日田郡東有田村字羽田酒井陸三君の四男歷藏君を養子とす。歷藏君又温厚質實農事に努むとぞ。

平井繁太郎君

三郷村大字字會字本組
明治四年八月生

平井家は筑前八女郡福局町の名家にして、君は市太郎翁の長男なり。明治廿五年一家を義元に託して現地に移り、菓子製造業を創め、次々村内熊谷幸兵衛氏の次女マツエ子を娶り琴瑟能く和して業務日に月に繁榮し家産大に増殖せり。近時材木商々兼營し名聲益々高く村内有數の人物として各種の公共事業に貢獻しつゝあり。君子女なく令弟榮次郎君の長男正人君を養ふて儲嗣とすと云ふ。

成恒龜松君

山口村大字成恒
明治八年四月生

成恒家は宇多天皇の末裔で、天皇の第八子敦眞親王四世の孫成頼、近江國佐々木莊に住し、因て姓とした。成頼十世の孫を永頼と云ひ右大將頼朝の命を奉じ、豊前國上毛郡成恒に住し、之より成恒と稱した。永頼の孫種隆に至り、應永年中下毛郡田島城に住し、越中守と號す。田島城址は即ち今の成恒の地である。其後地頭職を襲ぎ、細川氏の頃より庄屋に任じ、明治維新に及んだが、明治十年百姓一揆に會ひ、邸宅を焼かれ家財全部烏有に歸したので古書簡記の案すべきものがない。君は其當主で、着實温厚蠶業に従事し、農會役員養蠶組會長、其他地方の世話役として奔走する處多く、農事功勞者及精農者として表彰せられ、木盃、賞状等を授與された。又森山氏と共同して上ノ原驛前に軍用干草賣買事業を經營し其主任とし活動してゐる。君の長男忠君は中津中學で俊才の名があつたが、大正九年東京帝大農科を卒へ、既に熊本縣農務課技師に任じ、次男一夫君は陸軍に入り少壯有爲の士官である。

田尻多作君

和田村
明治十六年二月十二日生

君は田尻清三郎翁の長男で、明治三十五年中津中學を卒業し、同年東京農科大學農學實科へ入學し、明治三十八年同校卒業と共に大分縣農務課に職を奉じ、大に縣下農事の發展に盡したが、大正三年職を辞して故山に歸臥した。近時廣大なる新邸を建築して悠々田園の風趣を賞しつゝある。令弟稻二郎君は慶應義塾の出身で、祖母、兩親は如水村に別居し、君は子女三人を有して圓滿なる家庭をなしてゐる。

荒蒔龜太郎君

眞坂村小袋
明治元年十一月廿八日生

君は大幡村植山家に生れた人で、長じて荒蒔家を繼いだのである。夫人弦本氏を娶り、後渡鮮して活動したが、日清戦役に際し兵站部員となり、翌年第六師團に入營、滿期の後再び渡鮮し、日露戦役には領事館通譯として餘暇日語學校教員たり。三十九年戦功により賞金を賜ふた。大正八年八月小袋區長に當選し、翌年害虫驅除防委員となり、十年四月眞坂村會議員に擧げられ、大に村治の刷新に貢獻しつゝある。

平野文平君

大分縣由布川村大字朴木
明治十五年一月生

一身を故山の復興に捧げて、毀譽褒貶の外に終始一貫精進努力し、遂に一郷を擧げて俗を移し風を改め、墳墓の地を披弊困憊の窮地より救うて、鼓腹擊壤の理想郷たしめた我平野文平君は、平野伊太郎氏の長男として孤々の聲を一村紛擾の疲憊裡に擧げたのである。幼時から思想堅實、才氣俊秀將來の大成を囑望されたが長ずると共に能く農事に努め、輕佻浮華の時弊を冷眼し、一意父母に奉養を怠らなかつた。かくて名聲次第に高く、家督を相続すると共に村會議員に選ばれ、君が縦横の手腕は茲に村民の認むる處となり明治四十二年由布川、谷、狭間三村高等小學校組、會議員に當選し、君の識見手腕は益々地方に認められ、次で由布川小學校學務委員に推れたが、君は熱心誠實其任に奔走し、校舎の改築備品の充實、學用品公徳販賣の施設、兒童保護會の設立等異數



の貢獻をなし、大正四年三十四歳を以て一躍大分郡會議員に當選し、其議場に臨むや名譽職參事會員に推され、其他村農會副會長、名譽助役等に任じ、自治躰の發達に貢獻せる處は枚舉に遑がない。殊に明治四十四年、三十歳の若齡を以て地方の疲弊を痛嘆し、決然朴木産業組合の設立を主唱して之を實現し、爾來寢食を忘れて其經營に當り、東京關西各府縣の優良組合を視察し、耕牛改良、竹籠講習會、記念林造成等夙起晚眠奔走盡瘁し、日露戰後の好景氣に人心懈怠せる折柄地方人心を警醒し、閭村の民風を一新せしむるに至つた。朴木組合が大正四年大分縣産業支會より、同八年中央會頭より模範組合として表彰されたのは實に君の功勞の結果である。大正十年抜かれ大分産業支會主事補となり大正十二年十二月遂に支會主事に進み現に孤々として縣下産業組合の發展に盡瘁しつゝある。年齒方に四十有三、前途刮目すべきである。

梶原憲治君

中津古魚町
明治廿三年三月一日生

總產物商丸田やとして地方に知らる、梶原家は君の祖父によりて家運を起し、次で嚴君乙二郎氏肥料商を兼營して家運益々興つたが、氏字佐郡長洲町賀久庄十郎氏の三女ヲ子とを娶り、其間に一男二女を設け、縦横の機略を振つて巨萬の富を築いた。然るに不幸五十二歳を以て早世されたので、君は賢明な母堂の補佐により、十八歳を以て家督を相続し、梶原家は今より四代以前宇佐郡天津村庄より本郡眞坂村小袋に移つたので、朝鮮京城の成功者梶原末太郎君と近親である。君は大正七年中津中學を卒業したが、之より先大正六年三月三日嚴君の逝去に會ひ、大に自己の責任の重大なるに鑑み、着實穩健家業の發展を計り、母堂の補佐を受けて大正八年故人在世中の家屋に分店を開き大に家運を興隆しつゝある。母堂サ、子二十三歳を以て故人に嫁し、温良貞淑内助の功多く、歿後は巾幗の身を以て能く家運を支へ、剩さへ之を擴張しつゝある賢夫人である令妹貞子、静子共に學校在學中である。

藤富誠吾君

眞坂村大字小袋
明治十八年三月廿日生

藤富家は小袋の名家で、先代惠七翁夫人コヨ子との間に三男を設けたが、翁は六十六歳、夫人は六十歳で既に世を去つた。長男英太郎君は幼時より醫學に志し、昇上して慈惠院醫學校に學び、遂に内務省試験に及第して故山に開業し、夫人マサエを娶つて大に門戸が賑合つたが、不幸大正三年三月十九日、卅四歳を一期として早世した。孤兒美和子があること云ふ。君は令兄に代り農事に努め、大正二年櫻洲村赤迫弦本傳松氏の三女サヲ子とを娶り二男一女を設け、能く農事に精勵しつゝある。君は眞宗の信者として敬虔な信仰を有し、本山參詣四度に及び、温厚篤實を以て郷黨の稱讃する處である。和歌を能くし、其信仰を歌つたものに次の様なものがある。

吉水の流れを汲みしうれしさに、同じ道分、我友もかな。

吉水瀧深瀬は知らね共人の心の和ぐぞよき。

今仁 豊君

宇佐郡長峯村大字今仁
明治十六年九月七日生

豊子も風雲に際會すれば天下に翱翔し、俊才も数奇なれば田園に雌服するは世の常である。君の如き中津中學の俊才と唱はれ、卅七年士官學校に入學し、卅九年歩兵少尉に任じ、四十一年中尉に進み、少壯有爲の士官として前途を囑望されたが不幸二豎の犯す處となつて、萬斛の熱涙を吞んで故園に歸臥するの止むなきに至つたのは實に惜むべきではないか。抑々今仁家は地方の名家で、先代文司翁は村會議員、名譽助役等に擧げられ、地方に功勞の多かつた人で、村民は今も尙其徳を頌しつゝある。翁夫人シナ子との間に四男三女があつたが、長男勲司君覇氣に富み、夙に日本法律學校に學んで歸來地方青年の志氣を鼓舞し、村交通の發達にも頗る貢献する處があつたが、不幸四十にして早世したと云ふ。君は二男で又中途に志望を抛つて止むなきに至つた



…(十二)…
のは、獨々今仁家の損失のみでなく、地方人物經濟上實に慨すべき次第である。然し幸に後病癒ひ、大正七年西比利亞出兵の事があつて、八月小倉歩兵第十四聯隊に徴され、勇ましく萬里の征途に上り、翌年二月凱旋と共に勳六等旭日章、一時金壹千圓を賜ふて其功績を旌表されたと云ふ。爾來故山にあつて地方の爲に盡瘁し、大正六年村會議員、在郷軍人分會長等に選ばれ、大正八年宇佐郡會會議員に當選し、其他長峯産業組合理事、宇佐郡西部信用組合監事等を兼ね今や地方一流の名士として知られてゐる。君資性温厚能く人と交り、公共仁慈の心厚く、嚴君は古稀の長壽を保つて曩に世を去つたが、七十七歳尙鏗鏘たる母堂に奉養する事頗る厚く、隣閭其孝順の高風を敬慕欣仰しつゝありと云ふ。君始め横山村溝口魯哉氏の四女トシ子を娶り三女を設けたが、不幸トシ子の早世に會ひ後村内今仁保氏の長女恕子を娶り、長男時應君を擧げ圓満なる家庭をなしてゐる。

永吉 實君

三保村大字伊藤田字田中
明治廿五年十一月十日生

今吉家は地方の名家、始め舊下伊藤田村に住し、伊藤田小左衛門、同吉右衛門を経て斧太郎氏に至つた。氏は壯年村治に奔走する處多く村會議員伊藤田總代、今津銀行取締役、伊藤田耕地整理組合長等に任じ、郡内一流の名士であつたが不幸大正九年八月腦病で忽焉長逝された。氏は櫻洲村鍋島吾造（滿洲大連東郷町に於て貿易商として成功せる在庄屋）氏の令妹を娶り、二男を設けた。君は其長男で明治四十三年中津中學を卒へ、直に長崎醫專に學び、大正三年同校を卒業と共に縣立長崎病院に入り外科、皮膚科を研究し、大正五年四月別府朝見病院に轉じ、居る事一年有半、更に福岡大學病院に研究中筑後吉井病院副院長に招かれ、在任少時再び長崎病院に歸り、内科専攻して後京都大學病院、東京大學病院に内科を見言し、大正八年五月故山に歸して門戸を張り、以て今日に及んでゐる。婦人芳子は高田町長片多東洋氏の三女で、令弟公事君又俊才の名がある。

宇都宮 浩君

遠見編北杵築村
明治十四年二月十九日生

宇都宮家は豊後遠見の名家で、美濃將監廿三世の末裔である世々北杵築村に在りて田園に隱遁してゐた。牛山人寄する處の詩に曰く
徳祖果然延子孫。 一鄉人盡仰名門。
披山五百歷年久。 作邑三十分族蕃。
猶有田園傳世業。 好將耕該答君恩。
始知孝友堪爲政。 奉母春風笑語温。
君明治三十五年杵築中學を卒業し、同三十八年東京外國語學を卒へ、爾來仙臺第一中學校、大村中學校、滋賀縣立商業學校、宇佐中學校を経て中津商業學校に奉職し、熱心誠實子弟黨陶に従ひ側ら「英語公式の研究」、「英語の使ひ方等の著がある。現に中津殿町大横町に信すと云ふ。明治四十五年今上陛下に、大正九年東宮殿下に拜謁の光榮を擔つたと云ふ。令弟は慈母と共に故園を守つてゐる。

中根時雄君



モト郡大村字大戸原

君は三河武士の精英として知られた本多家の末裔にして維新前岡崎藩の老職たりし中根忠祐翁の四男である。幼時から俊才として知られ、長じて醫學に志し、笈を東都に負うて濟生舎に學び、明治廿三年醫術開業試験に及第し、次で東京府士族佐藤信太氏の長女房子を娶、遠く耶馬溪有志の招聘に應じて現地に開業した。爾來名聲日に月に揚り、門前常に市を爲すの盛況に、殊に火傷治療に於ては縣下第一流の名手として名を馳せてゐる。君三男五女あり、長男正雄君は齒科醫學士で長女美子は出北陸軍歩兵大尉に嫁すと云ふ。

(十四)

長尾猪太郎君

攻味郡八幡村大字古後 明治四年九月廿八日生

君は長尾一郎左衛門氏の長男なり。幼時より才氣あり、長じて農事に努め、又商業を營み、名聲次第に高く現に八幡村會議員、區長等の要職にあり、學校新築、道路改修、新地開墾等に努め、地方の爲貢獻する所頗る多し。君の令弟半次君は字小迫田中新六氏の養子たり、令妹イ、子は下郷村大字金吉字山浦光開寺住職に嫁し、次女マツエは在南滿洲大連相良六三郎君に嫁し、共に圓滿なる家庭を作れりぞぞ。

鳴 杏 市 君

津民村大字中畑字上川内 明治十九年十一月廿四日生

嚴君作市翁既に六十六歳の高齡に達し、十一歳先代を失ひて以來勤儉力行營々として怠らず、家産日に日に重く聲望年と共に高く、地方一流の長者たり。君は其長男にして柿坂高等小學校卒業後専ら農事に精勵して作市翁を輔佐せしが、廿三歳の時夫人マカ子を娶り琴瑟能く和して益々農事に精勵し嘗つて米穀改良の模範人物として知事より表彰せらる。既に家督を相續し現に上川内組長たり。

稻毛徳市君

東城井村大字曾木字下曾木 安政元年十月二十日生

君は八歳の時稻毛紋六兵衛氏の養嗣子となり、益々農精事に勵せしかば下曾木有数の資産家となれり。早く造林に着目し大に杉林造成に努めぬ。養儲嗣たる七郎君は日露戦役の功により勳八等瑞寶章並従軍記章を賜、既に三男一女の父たりぞぞ。

今吉麟童君

上津村大字跡田字門前 慶應三年二月二十四日生

しが大正三年功により勳七等瑞寶章を賜へり。歸來日出生鐵道機關手より耶馬溪鐵道機關手に榮轉し、濃厚篤實職務に精勵し現業員中の模範人物として知られてゐる。年齒方に四十有一。

岩田勘二郎君

東城井村大字四屋形字下矢櫃 明治八年九月二日生

嚴君松藏氏明治四十三年遠逝と共に君の家督を相續して益々農事に精勵せり。されば村農事品評會に數々受賞の榮を擔ひ、聲望次第に高く、衛生組長、消防組役員等に擧げられ現に東屋形代理區長たり。君資性快活洒脱にして頗る圓滿なる人物なりぞぞ。

入口福市君

東城井村大字下屋形原 明治七年一月二日生

君は明治三十年の頃樋田邑に井堰造設の議なるや即ち請負者として此業に携り、君の眞價は始めて認められ爾來年と共に名聲を加へ、或は區長代理として、或は衛生係として公職に任せしが、大正六年遂に東城井村會議員に當選し現に村治に貢獻しつゝありぞぞ。

岩藤牧藏君

上津村大字折元字道祖原 明治十七年二月三十日生

君小學校卒業後海軍に志願し、日露戦役に戦功ありて勳八等白色桐葉章一時賜金百五拾圓を賜ひ、二等機關兵曹に進み

阿部健七君

速見郡東村大字熊野
明治七年十二月廿三日生

阿部家は地方の名家で、嚴君甚吉翁は久しく東村長として現に尙古稀の高齡に近く村治に鞅掌しつゝ、ある地方の功勞者である。君は村内眞砂鹿太郎氏の三男に生れたが、幼時から才氣人に勝れ、十六歳の時甚吉翁の認むる處となり、入つて其養嗣子となつた。かくて杵築高等小學校に學び、更に同校附屬私學館に益雪の功を積み、十八歳業辛へて以來、家にあつて嚴君を輔佐し大に農事に精勵したが、明治卅九年大分縣農業助手に擧げられ速見郡役所に在勤し、後四十一年更に大分縣害虫驅除豫防吏員に任じ、四十年迄依然郡役所に在勤して頗る功績が多かつたが、翌四十四年産業組合創立と共に其専務理事に推され、次で大正三年組合長に選ばれ、爾來縣下産業組合の模範として、將た中央會表彰組合として



…(十六)…

同組合の異常な發展を見たのは、實に君の功勞が尤も大である。次で明治四十四年東農會長に選ばれ、農事の改良に意を注ぎ大正五年速見郡長から、大正十二年には縣農會から其功勞を表彰された云ふ。現に産業組合長、東村農會總代、速見郡農會議員、豊後産業同業組合評議員、東村内四ヶ所耕地整理組合長等に任じ、殊に速見郡畜産組合理事としては、郡畜産業の發展に寄與する處が多く、大正十三年大分縣畜産組合から其功績を表彰された云ふ。君資性温厚篤實にして頭腦明晰、事に當つて能く計り能く斷じ、人に接して城廓を設けず、公共仁慈の心が厚い。君は同族眞砂惣三郎氏の二女ヲジ子を娶り、琴瑟能和して養父母に仕へ其間に二男一女を設けたが、不幸次男は夭折したと云ふ。然し長男傳君は現に十六歳に達し、杵築中學に在學し俊秀の名が高く長女和子も女學校に學び才媛の名があると云ふ。君年齒方に五十有一名聲望一つながら村内を壓し前途益々多望なりと謂つべきだ。

中島音松君

山修村字大平
明治六年八月十日生

中島家は三百餘年連絡たる舊家にして先代伊平氏は久しく村會議員たり。伊平氏一女タズ子あり、即ち大江村吉川彌平氏の二男なる君を迎へて女婿とし家を嗣がしむ。君入縁以來益々家運を興隆し、大平組長、大歲神社氏子總代、教團寺門徒總代、村農會副會長等に選ばれ名聲頗る高し。君四男三女あり、長女靜枝は津民小學校教員たり先に城井村大字福土江本家に嫁せり、長男勝郎君は船員たり。

中島又一君

熊本縣戸北部水俣町住
明治十九年六月四日生

君幼時より才氣人に勝れしが、長じて林學を専攻し農科大學撰科を卒業して明治四十二年林務官として林區界に奉職し爾來名馳日に月に揚り、中津小林區署機木村官林製材所長として令名あり、馬溪の森林政策に就て幾多の抱負經綸を發揮せしが、幾くもなく熊本大林區署管内水俣小林區署長に榮轉し現に同署長として熱心誠實其職に努めつゝあり、年齒漸く三十九、君の前途や洋々たりと謂ふべし。

中島民司君

三郷村大字守實字本組
明治廿七年九月九日生

君の嚴君は日田郡西有田村小湊水の出身にして十七歳の時鍛冶職に従ひ、一時大阪に出でしが、廿七歳の時、現地に定住し、村内小畑良三郎氏の女を娶れり。君は其長男にして三郷高等小學校を卒業し、爾來家業を補佐し、大正八年字龍手鳥雄四郎氏の三女ナツヲを娶り、琴瑟能く和して家業に精勵し、温厚快活の青年として知らる。小畑家は守實の名家にして後嗣は大分縣森林技師たりとぞ。

長野順法君

三郷村大字中康字肥前屋
元治六年四月十五日生

明圓寺は溪中の名刹にして、肥前屋の北方丘陵を負ひ、巍然たる山門は縣道より仰ぎ得べし。先代寂靜師學徳共に秀で名聲溪中に振ひしが、夫人ミサヲとの間に唯一女ナサトあり君は福岡縣京都郡黒田村曲順信師の令弟に生れしが、明治川年ナサトの女婿となり明圓寺の嗣法たり、大正五年寂靜師入寂と共に其十二月住職に上り、温厚篤實念佛弘通に努め、眞俗二諦の妙理を宣傳しつゝありとぞ。

河野繁藏君

東城井村大字畑田
明治廿七年一月五日生

君は福岡縣築上郡唐原村大字原井川上家に生る、父新之助母シモ子君は其三男なり。八才の時西谷村字新地河野萬一氏の養嗣となり、小學校卒業後志を立て、大分縣立農學校醫科に學び、次で明治四十四年東都に上り東京麻布獸醫學校に轉校して、翌四十五年優等を以て同校を卒業せり。かくて同年七月獸醫開業免狀並に、蹄鉄工開業免狀を下附せられ、郷里西谷村に新に獸醫蹄鉄業を開業せり。次で廿四才の時村内見野半一氏の次女ソヨ子を娶り、琴瑟能く和して益々事務に精勵せり。かくて大正六年悟る處あり、東城井村大字樋田に移り、爾來地の利を得て業務年と共に隆盛に赴き、幾度か畜産品評會等を開催して大に斯業の發展を計り、郡内有数の獸醫として名聲頗る高し。君資性剛建常に積極的企劃を掲げて業務の擴張を計れり。年齒方に三十一歳、其將來や當に刮目すべきものあらんとす。

森山久九郎君

山口村大字森山
明治廿一年二月廿四日生

君は上津村大字折元字道祖原小野家に生る。父久右衛門母カメ子君は其二男なり。小野家は道祖原の名家にして、嚴君久右衛門氏は、會議員、村農會長、下毛郡會議員等の名譽職に在り聲望頗る高かりき。君は幼時より着實温厚の風ありしが、小學校卒業後教育界に投じ、十七歳の頃既に准教員檢定試験に合格して俊才の名を轟かせしが、次で大分縣師範學校に入學し、明治四十二年三月優等の成績を以て卒業し、直に三郷小學校訓導に任ず。翌年中津高等小學校訓導に榮轉し、同校解散と共に六月中津北部小學校訓導に任じ、熱心誠實具職に努めぬ。大正四年森山家の女婚として其女ヤス子に配し翌年中津南部小學校訓導に榮轉せり。次で大正六年大分郡鶴崎小學校訓導に任じ、翌年同郡明治尋常高等小學校長たりしが、後郷里に歸り現に大幡尋常高等小學校長として名聲益々高しとぞ。



林敬之助君

君は明治十年二月一日を以て上津村大字折元林甚九郎翁の次男に生れた。幼時から俊敏の名があつたが、長じて中津留心學校に學び、成績赫然として儕輩を抜き、舎長として生徒監の位置を占めた。後文官普通試験に及第し大分縣下の裁判所書記として各地に職を奉じたが、囊中の錐は益でも鋭脱の機鋒々顯はし久しからずして書記中の錐々として推稱さるゝに至つた。然し君が圖南の大志は終生一書記として甘んぜず、遂に決然職を辞して東都に上り、直に明治大學に入り、側



ら法曹界の巨人、元衆議院副議長法學博士花井卓藏氏の門に入り、其提撕を受けつゝ、側目もふらふ法律學の専攻に努めた斯くて君が天稟の才氣と不撓の勉學とは功を奏して明治三十九年優等の成績で同校を卒業し、直に判檢事登用試験に應じ

て芽出度及第の榮を担ひ、同年十二月試補として東京地方裁判所に實務を練習した。然し霸氣縱横の君は水く平淡な判官たるを好まず、翌四十一年職を辞して野に下り、同年六月辯護士名簿に登録を終へ、行李を收めて故山に歸つた。幾くもな、地を小倉にトし、林法律事務所を開いて多年蘊蓄せる專門的智識で四民の冤枉を伸ぶべく公平嚴正其職に當つてゐる。かくて名聲次第に擧り、小倉市會議員に選ばれ、今や市内一流の名士として活躍しつゝある。君の夫人は日田郡日出町の出身で、温良貞淑内助の功多く、既に其間に四男一女がある。君は平生讀書を好る、机邊常に新刊書の堆をなし、以て彈正庭裏論陣の孫吳たらんと期しつゝある。年齒未だ知命に滿らず、前途益々多望なりと謂つべきだ。上津村は溪中人材の寥々たる處、然かも君の如き名士を輩出せしは稀黨の誇と謂つべきである。

西郡輝雄君

西郡家は舊庄屋とされた名家で、父祖以來農業を營み、温厚篤實の老農として地方に敬重せられてゐた。君は此名家に生れ、幼時より俊秀の名があつたが、長じて醫學に志し、獨立自習、地方先輩に就て困難なる専門的研究に入り、夙起晩眠其絶倫なる精力を傾倒して遂に内務省醫術開業試験に及第した。時に君僅かに廿三歳、如何に君が刻苦精勵したかは此青春の成功を見て知るべきで、近時青年の士氣萎靡として振はざる折柄、君の如き人物は實に空谷の鞏音として、特筆大書すべきである。斯て君は目的を達すると共に陸軍に志願し、日露戦役に出征して三等軍醫に補せられ、各地傷病兵の救護に従ひ、功績が頗る多かつた。功により勳六等に叙せられ、除隊後は東京、京都、徳島等に或は病院醫員となり、或は獨立門戸を張つたが明治四十三年現地に帷を垂れ、地方を徳化し、門前常に市をなすの盛況を見つゝある。年齒方に四十有四、夫人芳子との間に二男一女がある。

岩見太治郎君

君は深津村生田善六氏の長男に生れたが、長じて中津片端中等科に學び、同校卒業後大分郡書記に任じ、大に手腕を認められ、廿三歳朝鮮に渡つて仁川民團役所書記に擧げられた次で廿八歳の時先代岩見吉次郎氏の請ふ處となり、其令妹ヨシ子に配したが、不幸ヨシ子は早世したので宇佐郡兩川村垂榮太郎氏の二女シエ子を繼至として三男を設けた。君入縁以來大に醬油醸造業の改良を計り、造石數年と共に、増加して今や年額八百石に上り、名聲又大に揚り、現に醬油醸造組合評議員に推されてゐる。君の長男茂君又頗る乃父の風あり、中津中學卒業後家業を輔佐して益々業務の發展を計り其に福岡縣企救郡會根村、池尻平助氏の三女留子を嫁り、琴瑟能く和して君に奉仕しつゝある。次男久雄君も亦中津中學を卒へ三男忠君も中津中學に在學し、共に俊秀を以て知られてゐる君資性着實温厚、至誠を以て世に處し、堅實を以て業務を營み、一歩々々其地歩を築きつゝある中津實業界の好典型と稱すべきだ。

小川内勸三郎君

君は同村堤矢野多市氏の長男にして、多市氏は東城井村軍人の嚆矢にして。明治八年小倉鐵臺に入營し、夜々として軍務に精勵し、同十年西南の役に會し、頗る戦功を建て後功により勳八等白色桐葉章年金廿四圓を給せられしと云ふ。君三才の時瀧三氏の養子となり、小學校卒業後家において農事に従ひ、長じて字上矢櫃岩水仁太郎氏の二女ヲ子を娶り、益々農事に精勵せり。されば村内に於ける毎次の農産品評會に屢々受賞の榮譽を擔ひ村内消防組合役員たる事既に三期に亘り、又現に村内衛生事務員、七所神社比子總代等の任にあり



瀧三翁の祖父政助氏は曾つて中津藩主より農業出精の廉にて褒賞を賜ひ、君の養母も亦舅姑に孝養の故を以て里門に旌表せられしと云ふ。

長尾清市君

長尾家は地方の名家にして長尾美濃守の末裔なりと云ふ。三郷村、玖珠郡八幡村大字古後、日田郡三花村大字伏木等に一族繁榮しつゝあり先代善次氏勤儉力行大に家運を興し邸宅土藏等を建築し名聲頗る高かりき。善次氏大字藤之本後藤嘉平氏の長女ナツ子を娶りしが、君は其間に生れぬ。君又質實温厚家業に精勵し溝部村野口看三氏の三女を娶り益々家運を興隆すと云ふ。

西 朝 夫 君

君は日田郡光岡村大字今泉伊藤匠藏君の末弟にして日田高等小學校卒業後吳服商に従ひ斯界に頭角を顯はせり。かくて明治四十五年四月西朝次郎氏の女婿として其長女小春に配し現地に分家し、吳服商店を創業し熱心誠實其職に努め、店運は日に月に興隆し家産大に増殖しつゝあり。夫人小春子又温良貞淑内助の功多く其間に一男二女あり。君年齒漸く三十才前途多望なりと謂ふべし。

名山清川

佐藤仙次郎君

下毛郡大江村大字嶺瀬
文久六年二月十五日生

佐藤家は源姓で、遠祖佐伯才右工門源清之は七十歳尙戰陣に活躍したと云ふ。今より四代の祖佐伯順齋を業とし九十歳の高齡を保つたと云ふ。其子仙右工門清柳の質で二子を有した。長女モンは村内御座家に嫁き、長男源藏後を継ぎ九十歳で歿した。源藏氏始めて佐藤姓に改め廿七八才より五ヶ年嶺瀬、大塚、角木三村庄屋元、御年貢取立役となり、二十ヶ年間嶺瀬村の名譽職に當り、男女七人の子女を有し八十二才で歿したと云ふ。君は源藏翁の長男で、幼時から農事に精勵したが、廿五才の時同村横松善三郎氏の二女マツ子を娶り琴瑟能く和して精勵刻苦大に家運を興し卅七才の頃より仲買商を兼營し、蠶網販賣元として今年額二十萬乃至三十萬枚を取扱ひ、名聲又大に揚り、區長、村會議員たる事十三ヶ年に及び、村内一流の人物として地方に功勞が多い。夫人マツ子温良能く内を修め、其間に一男四女がある。長男卯十郎君又頗る乃父の風を傳へ着實温厚の好青年である。

辛島良吉君

中津郡古魚町
明治十七年三月十二日生

辛島家は中津町内の家商として代々古魚町に住し、現中津商業銀行専務辛島松太郎君と近親である。先代岩吉氏夫人ア子との間に一男二女を設け、大に家運を興したが、不幸にして岩吉氏は四十八才を一期として早世した。君は其長男で幼時から着實温厚の人物として隣閭に推稱されたが、明治三十七年補充兵として北方野戰砲兵隊に召され折しも日露戰役中だったので、内地の守備に精勵した。満期後家に在つて父君を補佐したが、廿三才嚴君の長逝に會ひ家督を相續し、君は大に自己責任の重大なるに鑑み家業の質屋業を繼承して堅實な商才を發揮し、廿五才の時夫人トシ子を娶り、琴瑟能く和して益々家運を興し、名聲も亦共に加はり、現に中津商工會評議員に擧げられ、中津實業界の新人として推重されつゝある。君の令妹ナヲ子は扇城女學校卒業の才媛で森久春二郎君に嫁し、次妹サゲ子も亦同校を卒業してゐる。夫人との間に二男二女を設くと云ふ。觀世流謡曲の名手だ。

若松千三郎君

上津村大字跡田
安政四年七月廿五日生

君は北海道郡臼杵町に生る。父與史母コト子君は其二男なり。明治六年令兄の後を享けて家を嗣げり。君長じて藩士岡純一氏の四女里子(元大分縣會議長岡健一君令妹)を娶り、琴瑟能く和して一家を經營せしが、明治八年大分縣師範學校に入り、翌年卒業と共に大野郡野津市小學校長に任じ、爾來臼杵小學校教員、佐賀關小學校長に榮轉し熱心其職に盡せりかくて廿五年下毛郡教育界の人となり、以來中津櫻町小學校長、北部小學校長に歴任し、斯界の元老として名聲頗る高かりしが、明治四十三年馬溪に入り、悠々花月に吟嘯し側ら下毛郡立工業徒弟養成所教師として其職に努めたが、後上津小學校訓導に轉じ、現に子弟の薰陶に勵みつゝあり。



名山清川

廣次米藏君

下郡村大字金吉字山浦
明治二十年十一月廿二日生

先代半三郎翁は勤儉力行の人として大に家産を増殖し邸宅を改築し、名聲頗る高かりしが、夫人キチ子との間に二男二女あり、君は其長男にして、長じて野戰砲兵第十二聯隊に徵され、成績優良を以て射撃學校に入學を命ぜられしと云ふ。四十三年除隊の歳嚴君の逝去に會ひ一家の經營に當り、現に在郷軍人分會班長、害虫驅除豫防委員たり。又御祖神社改築世話人、金吉道路改修世話人として功績多しとぞ。

藤野清吉君

玖珠八幡村大字古後字辰原
明治六年十二月九日生

君は藤原家の末裔にして、藤野龜太郎君の家より分家せるものなり。先代政吉は天理教會員にして、久しく伍長たりき政吉氏夫人リム子との間に三男二女あり。君は其長男にして長すると共に勤儉力行大に農事に精勵し、側ら養蠶、椎茸製造等に努め、家産日に月に興へしつゝあり。崑山移村字馬場伊藤幸六氏より夫人フネ子を娶り其に二男二女あり、長男博君既に廿四歳に達すと云ふ。

名山清川
萬田關藏君

下毛郡鶴居村萬田

君は郡内一流の名士で、明治十七年九月萬田村外四ヶ村聯合會議員に當選して以來、地方の爲に奔走貢献せる處は枚舉に遑がない。明治廿二年町村制實施に當りては、村民の輿望を負うて其第一期の村會議員に選ばれ、爾來大正二年迄前後廿五年鶴居村會議員として功勞が多い。其間明治三十四年には名譽助役に當選し、同時に赤十字社鶴居村分區委員を囑託され、彼の日露戰役中は國民後援の任に當つて大に貢献する處があり、出征兵、傷病兵の慰問、遺族、家族の慰問、公債募集などと寢食を忘れて奔走した。功により勳八等白色桐葉章を賜い、赤十字社よりは木盃壹個を下賜された云ふ。之より先卅七年二月下毛郡農會評議員に選ばれ、卅八年更に下毛郡木炭同業組合評議員下毛郡會議員に當選し、郡政の刷新に努力し郡憲政派の重鎮として重きをなしたが近時全く俗を絶ち、悠々晩年を送りつゝある。君三保村より植山常二君を迎へ養嗣子としたが、不幸滿鐵任職中早世した云ふ。

武信輝吉君

(廿四)

下毛郡如水村大字金徳
明治廿一年三月生

武信家は地方の名家で、嚴君増二郎翁に久しく名譽村長、郡會議員、如水産業組合長、郡農會議員等幾多の名譽職に任じ、地方の爲功勞の多い人で、趣味として園藝、淨溜離を嗜み、共に玄人の壘を磨し、又算盤の名手であつたが、不幸疑に世を去つた。翁夫人ウエ子との間に三男一女がある。君は其長男である。君幼時より温厚篤實乃父の風を傳へ、中津中學卒業後下毛郡役所に入り、郡書記として縦横の手腕を發揮したが、大正八年十一月職を辭して實業界に入り、豊前銀行高級行員として、地方金融の疎通に貢献しつゝある。大正元年夫人サオ子を娶ひ、琴瑟能く和して老父母に奉養する處が厚かつたが、嚴君逝去の後は能く一家を經營して故人の祀をして益々盛ならしめつゝある夫人サオ子も亦温良貞淑内助の功多し、其間に公子、京子の二女がある君の令弟豐君は米國に遊び、次弟正吉君は中津中學を出下令妹富子は女學校に學んで才媛の名が高い。

加藤永次君

速見郡朝日村大字鶴見
慶應元年五月十七日生

六十年の半生を地方に捧げて、内は一家を興隆し、外は郷黨の共存共榮に努めし我加藤君の如き、又地方の傑物と稱すべきである。君は故清次翁の次男に生れ、幼時から俊才として知られたが、明治廿五年四月朝日村會議員に當選し、今日に至るまで、終始村治の刷新に努力して功勞尤も多く、大正十年村より自治功勞者として銀盃一個を贈られた元老である。其間明治卅六年には速見郡會議員の改選に當り、村氏の輿望を負うて大多數の當選を見、郡政發達に貢献せる處も頗る多い。其他鶴居區長、學務委員、道路委員、朝日産業組合長等に任じ、地方に貢献せる處は枚舉に遑がない。大正十年八月大分縣教育會主催の滿鮮學事視察團の一員として、は、新版圖の人情風俗を視察し識見人格共に地方に傑出した人物



である。君口出木下藩士石和嘉六氏の長女ヌマ子を娶り、琴瑟能く和して家運大に興隆したが、其間に二女を擧げた。長女は不幸夭折したが二女知加子に女婿として執君を迎へて後嗣とた。執君は宇佐郡北島城村大字日足の名家、永松雄三君の二男である。幼時から温厚篤實の風があつたが、長じて宇佐郡立農學校に入學し、成績優等で同校を卒業して暫らく農事の實際に當つてゐたが、適齡に達して陸軍に徵され、下之關重砲兵聯隊に入り、大正四年滿期退營と共に砲兵軍曹に昇進した。爾來再び農業に従ひ父兄を輔佐してゐたが、大正五年十一月加藤家との婚約成り、入つて同家の二女知加子に配した。かくて君は人縁以來琴瑟相和して能く養父母に仕へ、専ら農事に精勵してゐたが、大正十一年岳父の勇退と共に朝日産業出合理事に推され、現に其任に盡瘁しつゝありと云ふ。君に依つて開かれた加藤家は此好嗣を得て前途益々多望と云ふべきである。

名山清川

上田兩造君

鶴居村大字高瀬字かさ方
明治十四年二月四日生

君は明治卅一年大分縣師範學校簡易科に入學し、卅三年七月優等を以て卒業し、直に中津櫻町尋常小學校訓導たり。爾來各地に在任して濃厚學業の教育家として知られしが、現に中津北部小學校訓導に任じ、益々斯道の爲に盡瘁しつゝありと云ふ。

上西三治君

城井村大字平田字宮之馬場
明治十三年六月九日生

君醫學を志し明治四十一年愛知醫學專門學校を卒業するや直ちに縣立愛知病院助手として内科學を専攻す。大正五年迄名古屋市に開業の儘東洋紡績會社工場醫囑託たり、同年十二月歸國城井村に於て開業し多年中京の刀圭界にありて蕪蓄精練せる快腕を振ひつゝありとぞ。

江藤昇君

東谷村字岩下
明治三十三年十一月生

君は幼時より俊秀群童と異なり。十二才の時嚴君松二郎氏

…(廿六)…

を失ひてより慈愛深き母堂と賢明なる令姉小枝子との輔導により、曩に中津中學校を出で、暫らく大江小學校教員たり。現に東京慶應義塾理財科に學び俊秀の名がある。令姉小枝子嬢は熊ヶ崎高寺女學校の出身にして多年自村小學校に奉職して名聲頗る高し。

江利角直平君

城井村大字多志田
弘化元年二月三日生

君は茂助氏の長男にして父祖より代々着實なる農事家を以て知らる。居常勤儉力行倦む所なく常に農事の改良に意を注ぎ、毎次農事品評會に受賞の名譽を擧ひ、又夙に畜産、養蠶等に着目し、家産日に月に豊かに聲望益々高しと云ふ。

御座岡雅治君

東城井村大字東園形字落合
明治十八年六月二十六日生

祖父を用平と云ひ。嚴君を藤藏と云ふ。何れも勤儉力行家運を興隆せり。君は長男にして幼時より俊秀の名高く、小學校卒業後は専ら農事に努めしが、適齡にて陸軍に召され上等兵に進み、滿期退營の後、屋形青年會幹事たり、今現に屋形消防組合會計に任ずとぞ。

宇都宮直君

深津村大字下深水
明治十二年八月廿日生

宇都宮家は地方の名家で、先代順造夫人リヨ子との間に四男四女を設け、順造翁は六十一歳の高齡で長逝し、リヨ子刀自は古稀の長壽を保つてゐる。君は其長男で、四日市高等小學校卒業後農事に従つたが、明治三十二年陸軍に徴され、野戰砲兵隊に入り、成績優等で伍長に進み、日露戰役には逸早く非常召集に應じて萬里の征途に上り、沙河の大會戰にも參加したが、不幸病にかゝり、卅九年一月召集解除となつた。戰役中特務曹長に上り、卅九年四月勳七等青色桐葉章一時金三百圓を賜つた。翌年在郷軍人會創立に奔走し、其會長たる事二期、現に村會議員、學務委員、氏子總代等に任じ、名聲村内に高い。君は農事の副業として養蠶、牧畜に努め、牛馬を飼育して繁殖を計り、又養鶏、養蜂をも試み養蜂は洋種サイアライヌ三箱を飼育してゐる。夫人レツ子は村内西萩岩城宮作氏の長女で、其間に四男一女がある。

名山清川

荒瀬用吉君

東城井村大字曾木下
明治元年二月廿五日生

父壽平母タツ子君は其長男なり。小學校卒業後は専ら家庭にあつて父母を輔け、家業の側ら農事に精勵せり、長じて廿五歳の時内村永角平氏の長女タカ子を娶り、琴瑟睦く和して兩親に仕へ、村内の聲望次第に加はししが、青雲の志抑へ難く遂に兩親の許を得て奈良縣巡査を奉職し、同縣警察官中階々の名を博せしか、家事の都合により久しからずして辭任の上故山に皈れり。爾來家を放れず夜々として家業に努め、現に下曾木評議人として地方の爲に盡瘁しつゝあり。君不幸にして夫人との間に子女なく、曩に令弟竹次郎君を准養子とし、夫人の實妹シマ子を迎へて之に配せしが、大正二年頃しばらくは三子を遺して不飯の客となれりとぞ。君は趣味として圍碁を楽しむと云ふ。



…(廿七)…

名山清川
平井佐市君

下毛郡眞坂村大字小袋
安政六年五月十五日生

平井家は小袋の名家で、朝鮮京城に於て大成功せる貿易商梶原末太郎君や、仁川大和組主として、八道の各地に支店を設け運送業者の牛耳を執れる大和組主廣池亭四郎君に皆君の姻戚である。君は幼時から温厚篤實の人として着實穩健故山を守り、農事に精勵した郷黨の善人で、既に六十六才の高齡を迎へ、尙鏗鏘として壯者を凌ぐの健康を有し、日夕田圃山林を巡視して、俗塵の外に平和なる月日を樂んでゐる。然も子女の教育に意を注ぎ、長男勝君は仁川大和組に入つて一方の重鎮として敬重され、長女二女共に縣立中津高等女學校を卒業して才媛の名がある。斯くて名聲も亦地方に高く神社寺院等の總代に推されしを始めとし其他幾多の名譽職に就いて地方に功勞も頗る多い。人生五十年、既に廿年の餘世を過ぎ、洋々たる圓滿な家庭に子女の長成を樂しみつゝ、ある君も亦多幸ではないか。

太田 恢君

城井村大字平田字宮之馬場
明治三年二月十五日生

君宇佐郡高家村膳所家に生る。若冠にして日田郡公立教英中學校に入り、次で京阪地方に遊學せしが、明治廿二年陸軍教導團に入り。同廿四年卒業と共に陸軍騎兵二等軍曹に任じ、翌年一等軍曹に抜かれて陸軍戸山學校體操科學生となり、同廿七年終了し第六師團騎兵大隊に飯れり。次で日清戰役に出征し殊功を立て、勳章、記章、賜金等を受け、陸軍騎兵曹長に任せらる。同卅一年滿期と共に飯郷す、折しも太田楯臣翁の請ふ處となり其女シゲ子に配し太田家の嗣となれり、君神威試験に及第し嚴君の後を繼ぎ、敬神愛國の思想を鼓吹せ



しが、日露戰役に出征して特務曹長に任じ、勳七等並一時金及び恩給を下賜せらる。現に村小學校學務委員等に任じ名聲頗る高し。

田中 作造君



下毛郡東郡城村八丁目曾木

嘉永五年十一月十一日生

田中家は本姓大池氏、先代伸半延易積徳の人として知らる。天保六年以來曾木村年貢取立役、曾木組大庄屋手代役等に任じ生涯庄屋格に進み、明治十八年八十一才の高齡を以て長逝し。君は其長男で、明治廿四年家督相繼以來曾木村井手總代、曾木村戸長代理、曾木村戸長、學務委員、學區聯合會議員、曾木村上組伍長、埋火非管理者、村會議員等に任じ遂に大正二年名譽村長に推され、其他區長、神社寺院總代等に任じて郡内の模範人物として知られてゐる。嗣子伸義君明治大學に學び、今東城井村役場書記として將來を期待されてゐる。

武藤 榮君

下毛郡深井村下林
明治廿二年六月五日生

君の嚴君助市翁は大分縣師範學校第一回卒業生として郡教育界の元老で、久しく居村小學校長として盛名があつたが大正三年長逝されたと云ふ。君は其長男で中津中學を卒業後師範學校二部に入り、明治四十三年以來鶴屋、和出、山口、秣各校訓導として名聲を馳せ、大正九年四月深水校長に任じ、次で屋形校長に榮轉し、現に東谷尋高校長として、郡内少壯教育家の嚮々として知られてゐる。

橋本 嘉平君

下毛郡小楠村大字一ツ松
明治六年六月九日生

橋本家は地方の名家で、先代重米翁夫人カツ子との間に三男一女があつた。長男良吉君は夙に朝鮮に渡り、釜山港頭の巨商として知られてゐる。君は其次男で深井村松出鉄三氏の二女チト子を娶り、二十才の時分家して一家を興し、琴瑟能く和して農事に精勵し家運日に月に興隆しつゝ、ある、君二男三女あり、皆俊秀で、一家剛柔洋々として春風常に堂に漲つてゐる。

中畑笹市君

津民村大字中畑字本組
明治四年五月五日生

君は文七翁の長男なり。長じて勤儉力行大に農事に精勵し村民の信用次第に加はり、遂に村會議員に當選し、村治に貢獻する處多し、君は家業の側ら材木商を經營し、益家産を増殖しつゝあり。君村内中畑安米氏の五女ヨネ子を娶り、其間に五男二女あり、長男佐須郎君既に廿五歳に達し、久しく朝鮮に在りて商業に従ひ、曩に上津村大字落合千原源作氏の四女ヨシエ(三余女學校出身)を娶り三兒を設くどぞ。

長畑嘉作君

槻木村字刈屋
明治廿七年四月三日生

先代徳次郎氏は村會議員(四期)、刈屋組長(數期)嚴淨寺門徒總代等に任じ名聲頗る高く、勤儉力行家産を増殖し新地を開墾する事數段歩杉造林四万本に上れり、翁卅七年前山林中より惠比須大黒の金像を掘出し之に力を得て家運を興せりどぞ。翁子女なく村内石部宇市氏の二男なる君を迎へて養子とす。君才野治市君の長女を娶り、其間に一男一女あり。勤儉力行家業に精勵しつゝありどぞ。

長尾幸市君

次珠郡八幡村大字古後字七本木
明治七年二月八日生

先代幸平翁は新地開墾造林等に努め大に家運を興隆し、現に古稀の高齡を保てり。君は其長男にして、幼時より質實儉勤乃父の風あり。長じて村内字竹之木大谷佐吉君の令妹トヨ子を娶り、琴瑟能く和して益々家業に精勵しつゝあり。君五男二女あり、長男生次君は朝鮮第十九師團に徴され軍務を努め飯來君を輔佐す。次男壽美君は兵庫縣巡査を志願し、山崎警察署に在勤すと云ふ。

長尾駒太郎君

三郷村大字長尾野字長尾野
嘉永六年二月一日生

君は文右衛門翁の長男にして、廿二才の時家督を相續し、爾來質實儉素能く農事に努め、土蔵の新築、邸宅の改築、新地の開墾等孜孜として家運を興し、地方一流の老農たり。長男増太郎君既に卅九才夫人ヤナ子を娶りて四人の子女あり、二男莊次郎君、三男米三君共に分家せり。米三君は四男彌作君と共に陸軍に徴され、日露戰役に従軍して先に勳八等に叙せられし勇士なりどぞ。

小原惠三君

下毛郡西谷村
明治六年一月十五日生

小原家は地方の名家で、先代丈三翁夫人ハル子との間に二男を設け、村會議員、神社寺院總代等に推され温厚篤實の君子人であつたが。君は其長男で、幼時から才氣俊秀を以て知られ、長じて大分縣師範學校に入り、明治二十年三月芽出度同校を卒業すると共に、直に大分郡狹間高等小學校長に任じ、次で卅三年下毛郡に歸つて、大幡高等小學校訓導たり、幾くもな



く上津高等小學校長に榮轉し、農業補習學校を附設し校舎を改築するなど異數の好成績を示し、一躍郡教育界の重鎮となつたが、明治四十年二月玖珠郡視學に榮轉し、次で直入郡視學、森尋高小學校長、大分縣師範學校附屬小學校主席訓導等に歴任し、大正四年大分女子尋高小學校校長兼同校附屬幼稚園長に任じ、大正三年には文部大臣より普通免許狀を下附され、大正五年大分縣教育會より縣下の模範教育家として表彰さ

現代に翔翔し、各有力なる一地步を占むるに至る。地下の丈三翁も方に會心の笑を洩しつゝあるであらう。

名山清川

大倉治作君

君明治廿年身を教育界に投じ簡易科訓導となれり。後尋常科正教員に進み廿六年下郷小學校長に任じ、爾來在校十年にして柿坂小學に榮轉し、大正五年恩給を受け後復職して現に柿坂小學校訓導たり。長男治昭君は大分師範學校卒業後不幸早世せりと云ふ。

大森榮作君

君は平生質實儉素を守り、毫も輕佻浮華の風なく、一意家事に精勵せしかば家産日に月に増殖しつゝあり。君の次弟喜藏君は別に一家を創め、末弟恒造君は大分縣師範學校を卒業して三保村永松家の儲嗣たり。現に鶴居小學校訓導として名歴次第に高く信頼厚しとぞ。

柿坂陸八郎君

君は戸原の補香家に生れ一郎氏の嗣子として柿坂家に入りぬ。明治廿三年柿坂郵便局の創設に奔走し推されて其局長と

…(冊二)…

なれり。日露戦後功により正八位勳八等に叙せられ、一意今や郡内三等局長中の元老として推重されつゝある。長男一男君は朝鮮に在りて公職に従事すとぞ。

金田清君

君は牧太翁の長男なり。明治四十二年大分縣師範學校に入學し大正二年首席を以て卒業し、新進有爲の教育家として、溝部小學校、城井小學校訓導を経て大正十三年小學校長に榮轉し熱心誠實教育に従ひつゝあり。父兄の信頼頗る厚く前途洋々たり。

川附種次君

君は屋形家より入りて養嗣子たり。養父母に従順能く奉仕し農事に精勵し、常に農事品評會に於ては優良の成績を示しつゝあり。聲望又次第に厚く、西屋形協議人、消防組織係等に選ばれ地方の爲貢獻せる處多し君は業務の餘暇生花、佛花等の嗜みありとぞ。

大正十三年五月廿五日印刷
大正十三年六月一日發行



著者 名山清川社

大分縣下毛郡中津米町一〇四名山清川社

發行兼印刷人 三重昇太郎

大分縣下毛郡中津米町一〇四番地

印刷所 三重活版所

大分縣下毛郡中津米町千百四番地

發行所

名山清川社

307

316

終

